

5-3

社会科を軸とした「読解力」 育成の取り組み

大阪教育大学附属平野中学校 井寄 芳春

はじめに

本報告は、「読解力」を高めるカリキュラム開発のあり方を検討し、総合的な「読解力」育成に向けた試案を提示するものである。ベネッセが主催する「総合学力研究会」が策定した「読解力向上に関する取り組みの構造モデル」では、「読解力育成を支える豊かな教育カリキュラムの整備・充実(FAN+MORE)」に位置づけられた内容である。

「読解力」育成に向けては多様で柔軟なアプローチが可能である。「国語科等、特定の教科で取り組むタイプ」「朝の読書活動等で校時を統一して一斉に取り組むタイプ」「総合的な学習の時間(以下、総合的学習)で取り組むタイプ」等、様々なタイプの実践が考えられよう。

けれども、このような多様なアプローチが、学校としての組織的、体系的、計画的な取り組みとして、明確に位置づけられていなければ、「読解力」育成にはなかなか結びつかないであろう。「読解力」育成は、教師の日常的な指導レベルから学校文化や社会生活レベルにまで広がりをもつ実践的課題である。総合的な見地から実践可能な「読解力」の育成方法とその範囲を明らかにし、総合的かつ組織的に実践を積み上げていくことが求められる。

本校では、「教科指導の改善から取り組みを始め、具体的な成果を学校全体で共有し、拡張していく」というスタイルをとった。まず、①既に実施している教科指導の内容・方法の枠組みの中で「読解力」にあたるものを精選する。その上で、②教科を超えて必要な「読解力」やその指導方法を抽出する。さらに、③「読解力」育成に向けての総合教育力向上プランを形成する。④再び教科指導における成果や課題を検討する、という手順を踏む。「読解力」を軸に教科カリキュラムの部分的な再編を行い、指導内容・指導方法のどこをどう変えていくことが「読解力」を育成することになるのか、あるいは他教科、他領域とどう関連づけることが確かな学力の育成につながるのかについて、実践を通して検証する。

本論では、社会科の本質に根ざした「読解力」の内容やその具体的な育成方法について検討し、授業の成果や可能性を示した。今後、社会科を超え、他教科へ、あるいは小学校へ「読解力」の考え方や実践を広げていきたいと考える。

1 本校における「読解力」向上に向けての取り組み

1 すべての教科・領域で必要な「読解力」

「読解力育成を支える豊かな教育カリキュラムの整備・充実」の必要性を共有するためには、まず「読解力」とはどのような内容のものかということ

について、教員間で十分に共通認識しておかなければならない。OECDでは「読解力(Reading Literacy)」を次のように定義している。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力

読む行為のプロセスとしては、「①テキストの中の情報の取り出し」だけでなく、書かれた情報から推論して意味を理解する「②テキストの解釈」、書かれた情報を自らの知識や経験に位置づける「③熟考・評価」の三つの観点を設定している。(本報告書では「読解力」を構成する要素を「認識力」「思考力」「表出力」としているが、これは上記の読む行為のプロセスを敷衍したものである。)

「読解力」は、単に文章を読む力だけではなく、様々な場面で多様なテキスト(連続・非連続)をもとに考える力を養い、自らの知識と可能性を発達させつつ、社会に参加することまでも視野に入れている。学校と社会の学びを結び、自立した市民としての主体的な意思決定や行動を支える能力を身につけることを志向しているといえよう。「読解力」を育成することは、読むことや書くことを土台にして、学校での学びを社会の側から意味づけ、社会生活の文脈の中で再構成していく営みである。断片的な知識を網羅的に暗記し、正確に再生するような学力だけではなく、多様な情報を批判的に読み解きながら、社会的諸問題に対して妥当な解決策を構想し、提案する実践的な学力にシフトするための方法論を提供している。

「PISA型読解力」の向上のためには、「教科国語

の指導のみならず、各教科及び総合的学習等の学校の教育活動全体を通じ、『考える力』を中核として『読む力』『書く力』を総合的に高めていくことが重要」である(「読解力向上プログラム」・文部科学省)。「PISA型読解力」の向上は教科等の枠組みを超え、あるいは教科等が連携して学校教育全体で組織的に取り組まなければならない課題である。総合的学習と同様、教員間の緊密な連携と協働作業が不可欠となる。

「読解力」育成プログラムを策定するための最初のステップは、教科内容や教科固有の学び方を「読解力」の視点から再検討することである。このことは子どもの学び方や学びの段階性を読解力という枠組みの中で吟味し直すことともいえる。

例えば、すでに社会科以外にも、複数の教科で、「読解力」に関連した研究主題を掲げ、実践研究を展開している。「読解力」育成の視点や枠組みに基づいた教科連携の道筋を検討していきたい。

- 国語：国語における論理的・分析的思考力の育成をめざした学習
- 理科：科学的な見方・考え方を育む学習指導のあり方と評価方法
- 美術：読解的視点からライティングを重視した鑑賞指導を考える
- 英語：実践的コミュニケーション能力の基礎に向けて外国語学習へのモチベーションを高める工夫

2 「読解力」と考える力の関係 — 思考モデルとしての「読解力」 —

考える力の育成は確かな学力を身につけるといふ観点からも重要である。教科において考えるとはどういうことか、教科の特性に応じた見方、考え方にはどのようなものがあるかを精査する。その上で、それらと「読むこと」や「書くこと」をどのように関連付けるのかということについて具体化していく作業が必要である。「読解力向上プログラム」の中で、「各学校で求められる改善の具体的な方向」として以下の3つの重点目標が示されている。

目標① テキストを理解・評価しながら読む力を高める取り組みの充実

目標② テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取り組みの充実

目標③ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実

教科を中心として、以上の目標を視野に入れ、各指導場面に応じて、考える力を高めていくことが「読解力」を育成する上で基本的な要素である。「読解力」育成に向けては、特に国語科の果たすべき役割は大きい。本校の国語科では、例えば「読む能力」、「書く能力」に関して、以下のような到達目標を明らかにし、生徒や保護者に示している。

○読む能力

- 文脈に即して、語句の意味をとらえながら読む。
- 文章の論理展開の仕方に注意して読む。

- 文章の叙述の仕方に注意して読む。
- 文章を読んで考え、自分の意見を持つ。
- いろいろな文章を読み、必要な情報を集める。
- 書く能力
- 課題に必要な情報を収集し、取捨選択する。
- 中心となる事柄を明確にし、文章を構成する。
- 語感やリズムを大切にしたい表現ができる。
- 適切な言語表現を用い、文章を推敲し整える。
- 互いの文章を読み合い、書き方や表現技法を学びとる。

このような、国語科で培う読む能力、書く能力を効果的に生かして、各教科で考える力をよりいっそう鍛えることができるのではないだろうか。他教科が、国語科のカリキュラムや指導方略に学ぶことはそれぞれの教科の考える力に明確な輪郭と筋道を与えるものとする。

3 習得型学習と探究型学習のバランスと「読解力」の育成

平成17年10月17日の中央教育審議会「新しい義務教育を創造する(答申)」には、次のような記述がある。

基礎的な知識・技能の育成(いわゆる習得型の教育)と、自ら学び自ら考える力の育成(いわゆる探究型の教育)とは、対立的あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両方を総合的に育成することが必要である。

岩田(2006)は、「習得型の教育は、トレーニング的要素の強い教育であり、繰り返し学習による定着が求められる。それに対して、探究型の教育では、自ら問題を発見し仮説を立て、探究し検証していく学習が求められる」としている⁽¹⁾。重点の置き方の軽重はあれ、習得と探究の学習を効果的に組織し、両者を、より緊密かつ柔軟に関連づけたカリキュラム開発が要請される。

「読解力」を育成する際にも、このような習得(基礎定着)と探究(応用・発展)のバランスを図る

必要がある。例えば、習得場面では、テキストに応じた情報の取り出し方に関するトレーニング(繰り返し指導)を行う。また、一方でトレーニングを通じて習得した成果、能力を応用しつつ、探究場面に生かしていく。探究場面では主体的に考える機会を設け、実社会につながる実践的な学びの場を提供する。このことが習得の意味や価値を実感する契機となる。「習得力」と「探究力」は相互に関連づけられながら、スパイラルに高まっていくものととらえたい。

各教科の習得の「量」と探究の「質」をどう調整し、充実させていくかということが問われる。そのためにも、探究の過程で次々と問いが深まり、拡散していくような課題を与えることが重要である。さらに、自分の意見や主張を表現する場を設け、他者とともに学び合う機会をつくっていきたい。「読解力」は「社会に参加する」ことをめざすものであり、共同して、よりよい教室・社会・コミュニティを創造していくことに通じている。

2 社会科を軸にした「読解力」の向上

1 資料活用能力と「読解力」

社会科は、社会認識を通して市民性を育む教科である。本校社会科では、「認識形成力」、「課題追究力」、「意思決定力」の三つをキーワードとし、これらの能力をバランスよく高めていくことが目標達成への方策であると考え、カリキュラムを編成している。

認識形成力は主として、「それは何か？・どうなっているか？」を、課題追究力は主として「それはなぜか？」を、意思決定力は認識と追究を基礎に主として「どうすべきか？」を明らかにしていくことである。「事実を十分に認識した上で課題を追究し、意見を表明(意思決定)する」ような学習過程で確かな社会認識や豊かな市民性が養われる。

これらの学習過程で、生徒の課題意識を高め、考える力を伸ばすための素材となるのが「資料」である。社会科においては、資料は一般に次のように分類される⁽²⁾。

○形態からの分類

- 文書資料—図書・パンフレット・文献等
- 統計的資料—統計表・統計図表等
- 実物的資料—現物・標本・模型等

○作成の主体からの分類

- 最初から社会科授業のために作成された資料(教科書・副読本・資料集等)
- 広く一般の成人を対象にして作成された資料(新聞、雑誌、市役所の広報等)
- 限られた職業の人々や特定の集団に属する人々への情報提供を目的として作成されたもの。
- もともと個人的な記録として作成・保管されてきたもので、他人が利用することを予想していないもの。
- 社会科の学習過程で、必要に応じて子どもたちが作成したもの。

社会科学習は以上のような多様な資料に即して展開する。学習の深まりと広がりには教材開発の質と資料を効果的に生かす授業技術に大きく左右される。

けれども、子どもの発達段階に即して資料活用能力をどう高めているのかということに関しては、十分な研究がなされてこなかった。授業で資料を利用していても、資料を批判的に分析したり、その限界性を指摘したりするような能力を鍛えているものになっていない。

資料活用能力と考える力を一体的に高めていくために、「読解力」育成の概念は重要な意味を持つ。「読解力」は、単に資料を読むことに終始するものではない。資料を解釈、熟考、評価し、建設的に批判しながら利用し、社会参加に生かすことをめざしている。「読解力」は、社会科教育における資料活用・表現を軸に思考・判断、あるいは関心・意欲・態度を包含した枠組みを持つといえる。例えば、北(2005)は、社会科の「読解力」を次のように定義している⁽³⁾(下線筆者)。

- ①資料に当たって、問題解決しようとする意思力
- ②資料から事実を公正かつ多面的にとらえる力
- ③事実を操作し全体的な傾向や特色を考える力
- ④学習問題を解決に導く力
- ⑤資料の限界性に気づく力

このように、資料に即して「読解力」育成を図ることが社会科の特性といえる。社会科の本質に根ざした「読解力」と他教科で育成される「読解力」、さらに教科を超える普遍的な「読解力」とを相互に関連づけ、総合的に高めていくことが、学力をより確かなものにしていく基盤となる。

2 社会科で求められる「読解力」

社会科では、主として国語科で身につけるような「文章読解力」「作文力」等も必要である。一方で、小学校段階から身につけ、高めていくべきものとして、右のような、社会科の本質に根ざした「読解力」があげられる。このような能力やスキルを発達段階に即して高めていく指導・評価方略を確立していくことが肝要である(本報告では、統計活用能力と地図活用能力の育成事例を取り上げる)。

このような社会科固有の「読解力」は他の教科、総合的学習等にも応用・発展できるものである。各教科・領域で、どのような「読解力」が必要なのかを精選し、その育成にふさわしい学習内容や学習方法を具体化する作業が欠かせない。

- | |
|--------------|
| ①統計活用能力 |
| ②地図活用能力 |
| ③野外観察・野外調査能力 |
| ④映像読解能力 |
| ⑤史料読解能力 |
| ⑥新聞読解能力 |
| ⑦辞典・辞書活用能力 |

3 「読解力」の向上に向けての方略

「読解力」を育成するためには、認識形成、課題追究、意思決定の各段階に即した、読む・書く機会の量とレパートリーを拡充し、より高次の認識、追究、意思決定が可能になるように配慮しなければならない。各段階における「読解力」育成のポイントを以下に示す。

(1) 認識形成の質を高める指導方略

疑問や知的好奇心を高める資料を、知識体系と関連づけて提示し、それらを「深く読む」「広く読む」ことをベースにして、知識のネットワークを拡げる。その上で「深い気づき」「広い気づき」を促していくことが認識形成力を高める方略となる。認識形成の場面では、関係的思考、演繹的思考、帰納的思考が求められる。評価のポイントとしては生徒が作成した説明文や関係図の質の高まりを見ることがあげられる。

認識形成を促す「読解力」を育成するためには、以下のような工夫が必要である。

- 教科書の社会科用語を暗記する学習から、身につけるべき知識と関連づけられた資料に基づき、読み取ったことを話し合いながら展開する学習へ転換する。
- 目的に沿った多様な資料を準備し、各資料の読み取り方について指導するとともに、資料から読み取れることを列挙・分類したり、疑問点を抽出したりする場を設ける。
- 小学校段階から地図、統計、グラフ、映像等の

「非連続型テキスト」の「読解力」について、計画的、系統的、継続的に高めていく。

- 認識した内容、理解した内容を「説明文」や「報告文」という形で表現し、他者に伝えるという場を設ける。国語科の説明文の読み取りや書き方の指導と関連づける。
- 知識相互の関連性、関係性について関係図や構造図を通して整理し、全体としてどのような広がりやつながりをもった事象・課題であるのかを説明する。

(2) 課題追究の質を高める指導方略

社会事象に関する認識や科学的な視点と方法に基づくことで、社会科としての追究が成立する。また、認識をさらに深める意味でも、主体的な追究は必須の課題である。認識をより高次の段階へ進めるためには、発展的な学習の場において、追究力を向上させる指導方略のあり方が問われる。

課題追究場面では、批判的思考、分析的思考、総合的思考が求められる。課題追究を促す「読解力」を育成するためには、以下のような工夫が必要である。評価のポイントとしては、収集した資料からの読み取った内容、抽出された疑問点の質を確認することがあげられる。

- 教師の発問に対して、生徒が答えるという一問一答式の授業から、生徒が自ら追究し、他者と対話を重ねながら課題を解決する学習に授業に転換する。

- 資料を単に読み取る学習から、資料の特性を理解した上で批判的に検討したり、複数の資料を比較・関連づけたりしながら、熟考・評価する授業に転換する。
- 課題について、自分で予想や仮説を明らかにしてから、目的に沿った資料を収集させる。収集した資料については、事実と意見を分け、意見に流されないように指導する。
- 生徒に一次データから二次データを加工させるなど、実際に資料を作成することを通して、資料のもとになるデータに対して、その意味を問う態度を養う。
- 収集した資料から何を読み取ることができるかについて、グループで話し合わせたり、メンバーが収集した資料を交換させたりしながら、共同して読解する場を設ける。

(3) 意思決定の質を高める指導方略

意思決定とは、正確な事実分析や科学的な知識に基づき、社会的論争問題に対する認識と課題の追究によって得られた知見を、行動の指針として論理的に表現することである。社会形成者として、公的な問題を解決していこうとする意欲を高めるためにも、意思決定を含んだ授業過程を構成したい。意思決定場面では、論理的思考、創造的思考、

想像的思考が求められる。意思決定を促す「読解力」を育成するためには、以下のような工夫が必要である。評価のポイントとしては、主張文(意見文)の内容とその論理的展開の確かさを見ることがあげられる。

- 論理的な文章の構成を学ばせるとともに、自ら追究した内容や意思決定について論理的に説明し、議論し、評価しあう場面を設ける。
- 国語科における「主張文」「意見文」「レポート」の構成について学び、論理的な文章の書き方、評価ポイント等について、実例をもとに学習する場を設ける。
- 自分の主張に沿った資料を収集し、あるいは自分で資料を作成し、自分の考えを補強するとともにより説得力のある形で表明させるようにする。
- 社会的課題に関しての意思決定の場面を設定し、より真正の学びに近づくような授業構成を図る。論争的課題について異なる立場の意見を読み、争点に気づかせる。
- 多様な価値判断を想定し、異論・反論を想定しながら、それぞれの立場・根拠・視点・論理にも配慮した上で、自分の主張・意見を具体的に構成させるようにする。

3

実践例) 統計活用能力の育成をめざした社会科地理カリキュラムの開発

—地域の規模に応じた調査「大阪」を通して—

1

地域の規模に応じた調査 — 都道府県・大阪 —

この項目では、「地域的特色を追究し、とらえる学習を通して、都道府県規模の地域的特色をとらえる視点や方法を身に付けさせることを主なねらい」にしている。都道府県規模の調査においては、「調査」を基本とする学習を通して転移力、応用力

のある学習技能を身に付けさせていくことが要請される。特に大阪府は、小学校4年生で学習した内容との重なりもあり、小学校で得た知識や学び方を基礎にした発展的な学習を構想することが求められる。

2

社会科における統計活用能力

(1) 市民性の基礎として

今回、統計グラフ等の統計データの読解を軸に探究型学習を実施した。社会科授業においては、統計情報を解説し、その背景にある事象や現象、理由を想像し、推理し、自らの意見を構成していく能力を高めていくことは必須の課題である。

確かに社会科では、統計データを用いた授業を展開してきた。けれども、生徒に統計的視点をもたせ、統計的探究方法を駆使して問題解決に取り組ませたり、統計を活用させたりしながら意見文を構成するような学びの機会は十分に保障されてきたとはいえない。

統計データをもとにした、提案性のある意見を構成することを目標にして、「読解力」を高め、単元の目標を達成したいと考える。

(2) 課題学習に統計的探究プロセスを組み込む

全国統計教育研究協議会では、統計的探究プロセスとして、右のように、「とらえる・あつめる・まとめる・よみとる・いかす」の五段階を示している⁽⁴⁾。

統計的探究プロセスは、統計データに対する「読解力」を育成するための手順であり、課題学習のプロセスといえる。課題学習において統計教育のねらいや統計的探究プロセスを組み込むことによって、社会事象を数量的側面からとらえ、統計データをベースにした議論や意思決定が可能にな

る。さらに追究の質や表現の質が高まり、主観や狭い経験則に左右されない確かな学びを実現することができる。

- | |
|--|
| <p>a.とらえる：問題をとらえる段階、課題の発見・設定・問題の絞込み・明確化</p> <p>b.あつめる：調査の企画と調査の実施</p> <p>c.まとめる：データの整理・データ解析・分類・集計・結果表・グラフの作成</p> <p>d.よみとる：結果の考察</p> <p>e.いかす：評価と決定・評価する・意義づける・価値づける・価値判断する</p> |
|--|

木村(2005)は、「統計データの5段階読み」として、以下の項目を示している⁽⁵⁾。

統計データの5段階読み(木村(2005))

①傾向(規則性)読み・予測読み	散らばり(変動)のある現象の数量的データ、確かな統計データ(統計グラフ・表)から(1)集団全体の総量・総数、カテゴリー(項目)ごとの数量や代表値の特徴(多い・少ない、大きい・小さい、早い・遅いなど)を、変化の傾向(増加・減少、増大・縮小、激増・激減、拡大・縮小、上昇・下降、一定・変化なしなど)や分布の型を読み取り、「傾向読み(統計的規則性、統計的法則性)」、さらに(2)その傾向から将来を予測する「予測読み」をする。
②関係・関連づけ読み	2つ以上の現象、統計データを関連、関係づけて、因果、包摂、先後、異同、均衡、時間経過、包括、主副などの関係を読み取る。
③モデル化(定式化)読み	統計データ(グラフ・表)からその背後に潜む本質、仕組(形態・構造・機能)を発掘、導き出しモデル化(定式化)する読み(社会、地域、経済、歴史、世界などの背景を読み取る)。
④高次元・異次元の知(情報)への変換読み	統計データ(グラフや表)の直接的な傾向の読みにとどまらず、より高次の、また、次元の異なる本質的な特性などへ変換して、新しい知、新しい情報を発見する読み(高次元・異次元情報読み)。
⑤新しい知(情報)の創造読み	統計データ(統計グラフや表)の傾向から直接には得られない、より高次元の情報に変換して、独創的な新しい知・新しい情報を導き出す「新しい知の創造」「新しい情報の創造」読み。

このような「読み」の段階性やカテゴリーを意識して指導し、カリキュラムを構成することにより、統計データというテキストの「読解力」を段階的、継続的に育成していくことができる。

「読解力」は連続、非連続の多様なテキストを対象とする。確かに、文章の読解に関しては、国語

科を中心として豊富な指導方法が蓄積されている。しかし、統計データや地図、映像、絵画等に関しては、指導方法の開発の余地は十分にある。この、「統計データの5段階読み」は、今後、テキストに応じた「読解力」育成を目指すための参考になるものとする。

3 カリキュラムの構成

(1) 単元の目標

四つの観点別でみた、単元の目標は以下の通りである。

観 点	おもな目標
社会的事象への関心・意欲・態度	大阪の地域的特色や都市化について、自然現象や人文現象等、多面的・多角的な視点から追究しようとする。また、地理的事象を統計や地図をもとに、追究し、課題を発見し、表現しようとする。
社会的な思考・判断	大阪府の産業等に関する統計や主題図を多面的・多角的に分析したり、複数の統計を比較・検討したりすることによって、新たな課題を構成し、課題について、主体的に考えようとする。
資料活用の技能・表現	大阪の地域的特色に関する統計を様々な方法で収集することができる。また、統計情報をグラフ化したり、地図化したりするなど、より分かりやすい方法で整理し、表現することができる。
社会的事象についての知識・理解	大阪の地域的特色を大観するとともに、都道府県規模の地域調査の方法について把握することができる。また、都市化する地域の実態について、統計を利用しながら、他の地域との比較のもとで理解する。

(2) 「読解力」の育成を意識した単元の構成

単元は三つの段階で構成する。まず一つは「①大阪府を大観するー自然と歴史に着目して」、二つ目は「②探究Ⅰ：大阪の地域産業の実態ー統計を通じた認識と説明」、三つ目は「③探究Ⅱ：地域産業からの発信ー統計を活用した提言」である。①から②は、認識形成から課題追究、②から③は、課題追究から意思決定に向かう学習である。

以下、単元の流れに沿って、「読解力」育成に焦点化して、具体的な指導場面を詳述していくことにする。

(3) 単元の流れ

①大阪府を大観するー自然と歴史に着目して

A. 博物館新聞の作成

理科と社会が合同で実施した夏休みの課題である。生徒に、大阪府内の博物館に行かせ、博物館レポートに取り組みさせた(事前に博物館の紹介を行った)。「その博物館にはどんな展示物があるのか」「展示物の概要」「自分の興味を持ったコーナーや展示物」「博物館が行っている企画」等の記事(報告書)を書かせ、新聞形式にまとめさせる。大阪にある「自然史博物館」「歴史博物館」「郷土資料館」等に行き、展示物を観察し、得られた情報を整理し(文章・スケッチ)、まとめる。このような活動を通して、大阪の自然や歴史に興味を持たせるとともに、記事(報告書)の書き方に習熟させる。完

成した博物館新聞は文化祭に展示し、他学年の生徒や保護者にも公開した。

B. 地図の読解作業

地図を通して大阪の地形や土地利用の状況を把握させる。地図情報を的確に読み取る力を高めることは、社会科はもとより理科や総合的学習



グループで地図を解読する

等でも重要な課題である。活動としては、グループ単位(4名程度)で、一枚の20万分の1の地図(地勢図)を配布し、地図から気づいたこと、疑問に思ったこと等についてあげさせる。生徒があげた項目は、「地形」「都市の広がり」「交通網」「土地利用」等である。グループで話し合いながら地図から読み取った情報を分類し、要約して書き出していく作業が地図情報の「読解力」育成の基礎になる。

今回は、20万分の1の地勢図を利用した。地図の活用能力をさらに高めるためには、授業の目的に応じた多様な地図を分析的、総合的に読む機会を設けることが必要である。小学校段階から地図帳の効果的な利用方法をさらに開発していくなど、地図活用能力を系統的に高めていきたい。

C. 歴史年表の作成

歴史の授業で、「大阪の歴史年表」を作らせる。歴史の教科書や資料集から大阪に関係する記述を探し、取り出させ、古代、中世、近世、近代の時代の枠組みで整理させる。その上で、取り出した情報を既習の事項と関連づけ、その意味について考えを深めさせていく。

年表を作成させることは、単に何年に何が起こったということを確認することではなく、歴史的因果関係や身近な地域や世界とのつながりを考えさせることにある。テーマ別年表を作成することを通して社会事象をより歴史的な視点から読み解き、その意味や価値を検討することができる。特に、地域史を地図の読解と関連づけて学習することで、歴史的思考力が高まっていく。

D. 統計グラフからミニレポートの作成

大阪府の「可住地人口密度」に関する階級区分図を作成させる。それまでに、生徒には統計地図の種類(図形表現図・流線図等)について



統計グラフをもとにしたレポート作成

説明する。統計数値から統計地図に変換する作業を通して、統計地図に関心を持たせるとともに統計地図から情報を読み取る能力を培う。

グラフを読み取る手順を指導した後、「データおおさか2004(大阪府統計協会)」「2004/2005年度大阪府のすがた(とうほう)」や教科書、地図帳、地理統計(古今書院)等の「人口」に関する統計をもとに、ミニレポートを作らせる(一単位時間の中で作成させる)。

このような、数値から統計グラフを自ら作る作業を通して、統計グラフのもつ意味を理解したり、新たな疑問点を抽出したりすることができる。

統計グラフの読み取り方については、「統計データの5段階読み」を参考にし、生徒に手順を踏んで統計グラフを読み取る方法を指導した。

②探究Ⅰ：大阪の地域産業の実態—統計を通した認識と説明

産業から見た大阪の地域的特色について、自ら課題を決め、統計を活用しながら追究させる(一

人1課題)。複数の統計情報を使って実態を明らかにするとともに、統計情報をもとに理由や背景を考えさせる。最終的には、「大阪産業レポート(B4・1枚の用紙)」としてまとめ、グループ内で相互に交流する。

学習全体としては、「とらえる」「あつめる」「まとめる」「よみとる」「いかす」という統計的探究プロセス学習の基本的な流れを押さえつつ、主体的な学習活動を促していく。

このような学習では、「統計から何を、どう読み取ったのか」という「読み取りの質」が問われる。また、統計を比較したり、対比させたりする中で、「読み取ったことはどのような社会事象と関連しているのか?」「つまりどういうことが分かるのか?」「何が課題としてあげられるのか?」等についての深い吟味が必要である。個人で追究したことがらを相互に確認し、評価しながら、新たな課題を提案しあうような機会が求められる。先述した、「モデル化(定式化)読み」から「高次元・異次元の知(情報)への変換読み」へ至るプロセスにおいて、グループでの集団思考の場を導出し、様々な視点から自分の読み取り方や解釈を再吟味する場を設けたい。



統計書から情報を収集する

③探究Ⅱ：地域産業からの発信—統計を活用した提言

生徒は「探究Ⅰ」で、様々な統計や資料に基づき、産業から見た大阪府の実態や課題について追究してきた。この成果を生かしながら、大阪府の産業政策に対して提言文を作成させる。産業から見た大阪府の実態から浮かび上がってきた課題をさらに焦点化し、新たな統計資料を加味しつつ文章を書かせる。



グループ内で発表する

この提言文において、統計グラフを利用し、より説得力のある論理的な文章の作成に挑戦させる。

文章の書き方については国語の教科書を参考にさせる。大阪府では「知事への提言」を市民からメールや手紙等で募集している。この制度を利用し、大阪府知事に提言文を送るという設定で取り組ませる。提言文の内容や構成を中心に評価する。

(4) 指導と評価の一体化

評価方法は、全体として、ワークシートやレポートや提言文の内容、ペーパーテスト等も利用し

て実施する。生徒にあらかじめファイル(A4の紙ファイル)を配布し、授業で配布したワークシートや資料類をすべて綴じさせる。指導内容はプリントにして配布することにより、何度でも閲覧することができる。

また、調べ学習において収集した資料もファイルに綴じさせていく。このようにファイルをポートフォリオとして活用し、ファイルの蓄積物を通して評価していく。

4 「読解力」を軸にしたクロスカリキュラムの可能性

今回、統計活用能力や地図活用能力を育成するため、統計情報や地図情報の読解に重点を置いた授業を実施した。

「読解力」をコアにして、異教科が指導内容や指導方法の面で連携したり、「教科A」で習得した「読解力」を「教科B」、「教科C」で発展させたりするというような連携が考えられる。

例えば、以下に示すような教科・総合的学習との関連を生かしたクロスカリキュラムを構成することができる。

(1) 地図活用を軸にした理科・総合的学習とのクロスカリキュラム

地図の「読解力」を育成することは、地域の理解や地域間の関係(空間的因果関係)を認識することにつながる。地域社会、国際社会に生きる上で、生起する社会事象を地図上で確認し、地理的な背景に関心を持ち、理解することは極めて重要な課題である。例えば、環境問題や地域の安全や防災について課題を設定し、多面的・多角的に追究していく際に地図を活用したり、地図で表現したりすることは有効な方法である。

GPSやGISの普及に伴って、地図情報はますます重要な意味を持つようになる。地図情報を携帯電話に組み込んだサービスも始まっている。日常、身の回りで起こるローカルな諸問題やグローバルな諸問題について、その広がりを確認したり、他地域と比較したりする際に、地図情報を適切に読解し、役立てることは、さらに重視されよう。

(2) 統計活用を軸にした数学・技術家庭科・総合的学習とのクロスカリキュラム

数学では、毎年、夏休みの課題として、中学1

年生全員に「統計グラフコンクール(大阪府統計協会主催)」に取り組ませている。夏休みに入る前に、統計に関する基礎的な学習を行い、統計処理に関心を持たせるとともに、自ら課題を設定し、データを集め、グラフ化する過程を学ばせている。また、数学は論理的な推論や定理に基づいた証明の方法を教える教科である。社会や国語において、論理的に説明させるために、数学的な論理力に学ぶことは意義がある。

また、技術家庭科では、コンピュータによる情報処理の一環として、エクセルを活用したデータ処理の学習を行っている。エクセルを使って多様なグラフを作成させるなど、グラフ作成技能を身につけることにより、情報を適切かつ効果的に整理するだけでなく、他者にわかりやすく説明する力を培うことができる。

さらに、総合的学習において、客観的なデータをもとに追究を進め、まとめ、発表することは、探究に方向を与えると同時に、情報活用の実践力を高めることにつながる。このように統計教育を軸にしたクロスカリキュラムの開発は、「読解力」を育成する上で意義があると考えられる。

(3) 主張文の作成を軸にした国語科とのクロスカリキュラム

社会科において、提案性のある論理的な主張文(意見文)を書かせるためには、国語科との連携が欠かせない。社会科ではNIE教育にも取り組んでいる。その一貫として新聞の社説を読ませ、論理的な文章を書くためのアウトラインを教えている。国語科が蓄積している指導方略のレポーターを生かしていけば、さらに相乗効果が高まるものとする。

例えば、「事実と意見を分けて記述する」「接続語や文末表現に留意する」「パラグラフライティングを心がける」「主張したら必ずその根拠を示す」「反論を想定しながら論じる」などの、論理的文章の

構成方法を生かすことが課題探究の質を高めることにつながる。国語科において学んだ文章構成・表現技法を、他の教科でも生かすことは確かな調査・探究を導く基盤となる。

5 「読解力」育成の視点から小・中連携を考える

確かな学力を育成し、信頼される学校づくりに取り組むためにも、小学校と中学校が連携して児童・生徒の実態や地域の実状に応じたカリキュラムを開発していくことが求められる。教科教育、特別活動、道徳、総合的学習等、多様な学習場面の連携や接続、系統化を図り、言語環境を整え、「言葉の教育」を推進していく必要がある。

その際、「読解力」育成はフレームワークの一つとなる。「読解力」育成に向けての小学校と中学校を通した全体計画の策定、教科指導の系統化、「読解力」育成を支える学習環境の構築、学習資源の準備と共有化、具体的な指導・評価のあり方、指導技術の向上、こども理解等、様々なレベルでの協同作業を図ることが可能である。

国語科を中心に読解指導、論理的文章の作成方法、討論や発表、ディベートの方法、図書館の活用方法等、系統的、計画的、組織的に育成を目指すことが望ましい。国語科で学習し、身につけた学習スキルや能力を応用し、転移、発展させる

場を多彩に準備する。

本校の社会科は附属平野小学校と連携したカリキュラムの開発と実践を進めている。小・中の社会科で培いたい「読解力」育成のルーブリックやメソッドを作成し、子どもの発達段階に即した育成のあり方を具体的な指導方法に基づいて検証したい。国語科との連携はまだ十分ではないが、今後、実現していきたいと考える。

「読解力」を基軸に小学校と中学校が連携することは、評価規準・判断基準を明らかにした一貫カリキュラムを開発する際のすぐれた応用問題になる。子どもの発達段階を考慮しながら、どの時期にどのような「読解力」をどこまで習得させていくのかをカリキュラムの策定に反映させていく。このような教科を中心とした「読解力」育成のためのカリキュラム開発は学校としての「読解力」向上のみならず、学力向上の取り組みを促進する契機となろう。

4 成果と今後の課題

(1) 実践の成果

今回の実践を通して得られた成果は以下の通りである。

- ①具体的な読解の視点や方法、手順を詳細に示すことによって、それを手がかりに読解を深めていくことができた。また、教師が例示したホームページや白書から、自ら統計データを収集したり、分析したことを文章化したりすることができるようになった。
- ②意見を主張する際に、その根拠となる客観的な事実を提示することの大切さを理解したようである。単に自己の思いつきではなく、複数の統計データを収集し、比較しながら分析することをベースにして意見を構成できるようになった。このことは、提言文の文章構成からうかがうこ

とができる。

- ③総合的学習においても、アンケート結果をエクセルでグラフ化したり、調べたことを地図化したりしてまとめ、発表するグループがあった。教科で培った「読解力」を総合的学習の場で発展的に活用させることによって、教科と総合的学習のつながりをあらためて認識させることができた。
- ④今回の学習は、発展的な学習である。この学習で学んだ一連の統計活用の方法が、それ以後の習得型の学習でも生きている。教科書や資料集、参考書等の文章記述に頼らず、統計表や統計グラフから読み取った内容をもとに自分で考えたことを表明することができるようになってきている。

ただし、十数時間の単元のみで、飛躍的に「読解力」が高まるものではない。探究型学習の成果を習得型学習に活用し、さらに探究型学習に返していくような往還性が求められる。

(2) 今後の課題 —「学力向上のための基本調査」をふまえて—

「PISA型読解力」は、先述したように「多様な情報を批判的に読み解きながら、社会的諸問題に対して妥当な解決策を構想し、提案するような実践的な学力」であり、このような学力は問題解決力の概念に近いといえよう。

そこで、2004年、2006年における本校の「学力向上のための基本調査(以下、基本調査)」の「問題解決力」の項目を比較することにした。「問題解決力」の下位項目にあたる「筋道を立てて、ものごとを考えることができる」では、「とてもあてはまる」「あてはまる」とした生徒が、2004年は52.5%であるのに対し、2006年は60.6%に。また、「自分の考えや意見を相手にわかりやすく伝えることができる」では、2004年は37.4%であるのに対し、2006年は45.8%に。さらに、「調べてわかったことをもとに、自分の考えを持つことができる」では、2004年は61.7%であるのに対し、2006年は63.6%にそれぞれ上昇している。

2004年度の本校の研究テーマ(副題)が、「確かな課題意識と思考力を育成する指導と評価」であり、このような研究実践の成果が徐々にではあるが、調査結果にも現れてきたものと推察する。

けれども、「基本調査2006」では、本校の生徒は、受検校全体と比較して、国語、数学の得点は高いものの、「学びの基礎力」「社会的実践力」は弱いことがわかる。特に、「学びを律する力」「自ら学ぶ力」「学びに向かう力」のポイントが低い。確かに、現状では、「読解力」は平均を上回っているが、今後、「学びの基礎力」や「社会的実践力」が高まってこない、学力全体が低下していくことが懸念される。

基本調査では、「読解力」と国語や数学の教科学力との関係には正の相関があり、学びの基礎力が高い子どもほど「読解力」は高い。数学や国語の教科学力に引きずられる形で一時的に「読解力」があるように推測されても、「学びの基礎力」や「社会的実践力」が本格的に高まっていかないと、長期的に見ればやがて頭打ちになる。

「読解力」は、「自己を存分に発揮して生きるこ

と」や「積極的に社会に関与し続けること」を両立させていくことにある。そのためには、「学びの基礎力」の下位項目にあたる「豊かな基礎体験」「学びに向かう力」「自ら学ぶ力」「学びを律する力」、あるいは、「社会的実践力」の下位項目である「豊かな心」「自己成長力」等の育成が不可欠である。

一方で、「読解力」を育成していくことが、これらの「学びの基礎力」や「社会的実践力」を育成していくことにつながっていくのではないだろうか。両者は相互に波及効果をもたらす、相乗的に高まっていくものである。「読解力」を高めていくというアプローチから「学びの基礎力」や「社会的実践力」を向上させることも考えられる。

ただし、このようなことは以前より指摘されてきたことである。「読解力(Reading Literacy)」の定義や概念、方法論を生かし、子どもの確かな学びにつなげていくためには、今後、以下のような構えや態度を養っていかなければならないと考える。

- ① 混迷する現代社会の問題、地域の問題は複雑で難解であり、容易に答えることができない。相対主義に陥らず、多様性を受け入れながら、複数の解決策を同時に吟味する姿勢が求められる。簡単にあきらめず、即座に正解を求めたり、答えを出そうとしたりせず、連続的、長期的、総合的に、粘り強く考え続ける意欲や耐久力が必要である。
- ② 自分で考え、問題を発見・解決し、自己の意見を相手に表明していこうとするためには、その基盤として有能感や自尊感情に支えられていなければならない。他者に肯定的に受容され、共感的に受けとめられる場や安心して学べる機会を設けることが重視される。安心して自由に表現できる学級、開放的で受容的な学級を形成し、個性的な自己決定を保障していくことは喫緊の課題である。感情に流されず冷静に事実を追いかける姿勢も大切である。
- ③ テキストを読む行為には、即断を避け、自己の予断や偏見、先入観、誤解等に対して注意深く省察し、公正に判断する姿勢が求められる。自分の読み方、表現の仕方はこれで本当に正しいのかという視座を備えておかなければならない。謙虚に人の考えを傾聴し、事実に基づいて自己の考えを反省的に構築するような地道な態度が求められる。

- ④事象や現象の部分や細部をじっくり観察し、分析しつつ、全体像や本質、未来の在り様を洞察するような能力を高めていかなければならない。仮説を立て、検証し、得られた結果を適確に整理するような実証的な態度が求められる。総合的学習や各教科において、主体的な探究学習はますます重視されなければならないと考える。
- ⑤学習している内容や学習スキルが、どのような意味や価値があるのかについて吟味する姿勢を培っていかなければならない。意味、価値を問う姿勢が「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させる」ことや「社会参加」につながっていく。相手意識、当事者意識、参加意識を培う意味でも、多様なテキストを活用しつつ、学習内容にリアリティー（現実の社会・世界への働きかけ）が求められる。

「読解力」育成のためには、一人ひとりが自分自身の納得に基づいた意見を形成した上で、多様な意見の違いから学び合える学習の場を拡充していくことが大切である。個人の確かな社会認識、課題追究、意思決定も、他者の学習と重なり合い、響き合うことによって、さらに豊かなものになっていく。個人の学びの確かさと他者とのかわり合い、伝え合いの豊かさが、「読解力」を育成し、確かな学びを創り出すための原動力になる。

「読解力」育成は、単に読解スキルの形成に終始するものではない。テキストに対し、「どう考えるのか」ということを自覚的に明らかにしていく中で、自己と社会との関係を再構成しながら、自分や社会にとって何が必要なのかということ問い続けていくことである。学習を支える基盤として

の読解だけでなく、「自分はどうするのか」や「自分をどうするのか」、あるいは、「自分はどんな社会を望むのか」という問いをもとに、主体的な生き方の問題としての読解のあり方を検討していくことを視野に入れなければならない。

「読解力」育成は、教科の本質に深く迫り、学びの質を高めるための手段となりうる。また、時代の変化に対応した、新しい教科像のあり方を構想するためのヒントを与える。さらに、自らのアイデンティティ形成やコミュニティ形成に大いに寄与するものである。今後とも、「読解力」を育成する授業のバリエーションを増やししながら、確かな学力を育む指導方法やカリキュラムのあり方を検証していきたいと考える。

【引用文献】

- (1) 岩田一彦(2006)：新しい社会認識教育実践のための行動計画—何をどう変えるか—、(社会認識教育学会編「社会認識教育の構造改革—ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発—」、明治図書、p.310)
- (2) 大森照夫等編(1986)：社会科教育指導用語辞典、教育出版、p.78
- (3) 北俊夫(2005)：社会科における「読解力」向上の課題、教育展望 第51巻・第4号、教育調査研究所、p.23
- (4) 全国統計教育研究協議会(1999)：統計情報教育の理論と授業実践の展開、筑波出版会、pp.34-35
- (5) 木村捨雄(2005)：進む情報化社会の統計リテラシー、東洋館出版社、pp.14-16